

朴美代子さん  
第六回口語俳句作品大賞  
受賞おめでとう

中村 和弘

『口語俳句』の歴史は古く遡れば明治時代になる。当時俳句を自由詩形への希求が生れ定形韻文の概念を否定、口語による自由な発想での俳句近代化の運動が盛り上った。私には口語俳句と言うと種田山頭火、尾崎放哉等思いおこす。

現在口語による表現が普通になっているが口語で表記すれば全て口語俳句と言うわけではない。思想、現実認識、詩性の強さによる人間主体あってこそ口語俳句である。

生き残ったからだ掻いてゐる 山頭火  
うしろすがたのしぐれてゆくか 〃  
うつむいて石ころばかり 〃  
等々思い出す。

朴美代子作品をはじめて読んだのは現代俳句協会の東海地区の会報、それ以来最も注目してきた一人である。どの

作品も詩性を帯びて作者の境涯が滲む。

頭痛はげし鯨が泣いているのです (令和四年陸五月号)

わが柵小窓とじれば北風止む 〃

選句であり迷うことはないが、この二句ともに心うたれたが、陸五月号では後の句を採り解説した。この句の北風はただの北風ではない。在日韓国人として日本で暮してきた歳月が滲む。後句の鯨も歳時記の鯨ではない。作者の形象した鯨である。象徴性を帯びて私の心にひびく。そして下五の表現(へいるのです)がまことに美事としか言いようがない。

この度の受賞作品どれも佳いが以下の句に特に注目した。

足の指反らしてさみし蝶の昼

菊ならばつめたいほどの白がいい

赤とんぼ風の泣く朝生まれの夕顔の種をくれたる人も病む

鼻の骨つめたい生きてゐるらしい

朴美代子作品を読みつつ、アメリカでの差別を根底にした『ザリガニの鳴くところ』(デューリア・オーエンス著)を思い出した。

(田中陽氏による選考経過・及び受賞作品『母』<sup>オモヒ</sup>は口語俳句振興会会報『原点』より転載)

# 朴美代子「母」オモヒに大賞

奨励賞に重富蒼子（「新墾」）ら三氏

口語俳句振興会主催、文學の森後援の第六回口語俳句作品大賞に朴美代子氏（名古屋市・「主流」）「陸」「菜の花」所属）の「母」オモヒ（二〇句、同奨励賞に重富蒼子（北九州市・「新墾」、米岡隆文（大阪府・「無限」）、野田麻由可（茨城県・「層雲自由律」「きゃらほく」「群抄」）三氏の作品の受賞が決まった。

今回の応募作品は九五篇におよび、一次と二次選考を経て三次（最終）選考に残った一四篇を対象に、コロナ禍の去った今回は一般公開のもと開く予定だった選考会議が、会場の不都合等が重なったため、急遽通信選考に変更され、谷口慎也選考委員長をはじめ二二名の委員が、一位（5点）と五位（1点）の順位を付して選考、その結果として前記、作品大賞ほか奨励賞三篇が決定したものの。

作品大賞・朴美代子さんは現在、名古屋市の病院に入院中の身で、依頼の写真も過去に全部処分してしまつて、手元に皆無の由。しかし、受賞の報に「元氣が出ました！」との電話の声に僕自身、涙の出るほど嬉しかった。

顕彰記念（誌上）俳句大会は明春開催、誌上講演として「文学としての俳句」、文芸評論家・俳人の平敷武蕉氏のペンが期待されている。

（田中 陽）

# 第六回口語俳句作品大賞受賞作品

オモニ  
母

朴美代子

〔名古屋市在住・所属〕  
〔主流〕〔陸〕〔菜の花〕

「母<sup>オモニ</sup>故郷に帰ろう」日本海に散骨す  
掴むものなくて己をつかむ蔦  
風に老う鳥の目と合う花の昼  
足の指反らしてさみし蝶の昼  
言葉なんぞ目刺の頭噛み砕く  
木の実独楽回りつくせば失語症  
北風に頂きました永住権

菊ならばつめたいほどの白がいい  
赤とんぼ風の泣く朝生まれたの  
木の葉時雨紙一枚の本籍地  
今日も過去折鶴の首かたく折る  
折鶴の胸ふくらます母オモニの忌  
吸い飲みに水が半分秋に入る  
夕顔の種をくれたる人も病む  
生まれかわるならとんぼうとまる草がいい  
頭痛はげし鯨が泣いているのです  
死ぬときは朝顔白く咲く時間  
鼻の骨つめたい生きているらしい  
我が柩小窓閉じれば北風止む  
泣きにゆく母オモニの胸ほし匂ほし